熱田社の起源について

前川, 明久 / MAEKAWA, Akihisa

(出版者 / Publisher)

法政大学史学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政史学 / 法政史学

(巻 / Volume)

15

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

14

(発行年 / Year)

1962-12

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00010670>

熱田社の起源について

前川 明久

熱田社の鎮座起源を語るまじまった古い史料としては、釈日本紀、卷七所引の尾張国風土記逸文があげられる。すなわち

熱田社者。昔日本武命巡歴東國一還時。娶尾張連等遠祖宮酢媛命。宿於其家。夜頭向厠。以隨身劍掛於桑木。遺之入殿。乃驚更往取之。劍有光如神。不把握之。即謂宮酢姫曰。此劍神氣。宜奉斎之為吾形影。曰以立社。由郷為名也。

とあって、右にみえる劍はとりもなおさず草薙劍である。和銅六(七一三)年、風土記撰上の詔がだされた頃には、熱田社はこのような由来をもっていたのであろう。

しかし問題となるのは、右の由来をみても記紀にみえ

熱田社の起源について(前川)

る熱田社に関係ある記事を調べてみても、劍の所持者であるヤマトタケルが主人公となって語られていることである。ヤマトタケルは実在の人物ではなく、その名は倭の勇者という意であって、記紀にみえるタケルの物語は五世紀を中心とする地方豪族ことむけの皇族將軍説話が本体であり、それが六世紀のはじめに宮廷の旧辭として定着したものと考えられているように、伝説上の人物であることがあきらかにされている。加えて草薙劍の活躍はタケルの東国遠征において語られているのであって、この劍が伊勢神宮の靈力を代表した象徴であり、記紀にみえるタケル伝説の述作には伊勢神宮関係者の加上・発展がなされたのではないかとの指摘もある。このように草薙劍をまつる熱田社の起源は、タケル伝説とも伊勢神宮とも深い関係をもっていることがうかがわれ

るが、かかる関係はどのようにして生じたものであろうか。この点を中心に、あらためて歴史的事実としての同社の起源をさぐりたいと思うのが、小稿の目的である。

二

まず、熱田社にまつられた草薙劍が、記紀にはどのように語られているかについて考えてみよう。周知のように、この劍はスサノオの命が出雲で八岐の大蛇を退治したとき、その尾から出現したと語られている。すなわち神代紀、宝劍出現章の本文に「中有_二一劍_一。此所謂草薙劍也。素戔嗚尊曰。是神劍也。吾何敢私以安乎。乃上_二獻於天神_一也」とあって、劍は天照大神に献上された。

なお、右の記事にみえる草薙劍に註して「此云_二俱婆那伎能都留伎_一。一書曰。本名_二天薙雲劍_一。蓋大蛇所_レ居之上常有_二雲氣_一。故以名歟。至_二日本武皇子_一改_二名曰_二草薙劍_一」とあって、この劍に二種類の名があったことに注意したい。書紀第二一書・第三一書・古事記には、それぞれ

○是号_二草薙劍_一。此今在_二尾張国吾湯市村_一。即熱田祝部所掌之神是也。(紀第二一書)

○即别有_二劍焉_一。名爲_二草薙劍_一。此劍昔在_二素戔嗚尊許_一。今在_二於尾張国也_一。(紀第三一書)

○取_二此大刀_一。思異物_二而_一。白_二上於_二天照大御神_一也。是者草那

芸之大刀也。(記)

とみえ、アメノムラクモの劍の名は記されていないし、またこの劍が尾張国熱田社にあったことも書紀しか説明していない。

さて、この劍がもっとも力を發揮して語られるのはヤマトタケル伝説においてである。タケルは東国遠征の出発にあたり伊勢神宮に詣で、姨の倭姫命から草薙劍と御囊を授けられる。タケルは焼津(記は相武、紀は駿河)の話とし若干の相異がある)で向火の難にあうが、古事記ではタケルが姨からもらった囊の口を開くと火打石があったので、草薙劍で草を刈り火打石でこれに火をつけ、難を脱することができたと述べている。これに對し書紀では火打石で向火をつけ難を脱したとだけ記し、草薙劍のことはでてこないが、この箇所では「一云。王所_レ佩_二叢雲自抽之薙_一攘王之傍草。因_レ是得_レ免。故号_二其劍_一曰_二草薙_一也。叢雲此云_二茂羅玖毛_一」(景行四十年紀)と、この劍の名のおこりを附会して註している。やがてタケルは東征の任を終えて尾張に立ち寄り宮酢媛の許に留まるが、伊吹の山の神を平定するために劍を媛の許に置いたままタケルは出発する。しかしタケルは神の祟りを受けて敗北し、尾張に立ち寄り伊勢国能煩野につき、倭の都をしのんで四首の歌をうたうが「嬢子の床の辺に

我が置きし つるぎの太刀 その太刀はや⁴とうたい
おえて没するのである。右の歌は書紀にはみえないが、
太刀はあきらかに草薙剣をさしている。たしかにタケル
の運命は伊勢神宮の靈力を代表するこの劍を携行しなかつたために、きわまったといつてよい。

いままで述べてきたタケルの東征伝説で草薙劍の所在を考えてみると、それは伊勢神宮から東國を経て尾張に移動したのであり、「初日本武尊佩草薙横刀。是今在尾張國年魚市郡熱田社也」(景行五十一年紀)とあるように、この劍が留まりまつられた所が尾張國熱田社である。いいかえれば熱田社にまつられた草薙劍の出所は伊勢神宮であり、記紀神話でこの劍が伊勢神宮の祭神である天照大神に献ぜられたり、あるいは伊勢神宮に關係の深い神々の名が列挙されている古事記の天孫降臨説話⁵の中で、この劍が鏡・瓊とともにニギの命に授けられていることなどからも、ひいては熱田社は伊勢神宮と深い關係をもち、この關係がタケル伝説に反映しているのではないかと考える。そこで、伊勢神宮と熱田社との關係を考える前提として、熱田社の所在地である尾張と、この祭祀にあたった宮酢媛を祖とする尾張氏について、大化前代における実態を考察してみる必要がある。

熱田社の起源について(前川)

三

大化前代の尾張には、多数の名代・子代の部が設置され、しかも朝廷の軍事を担当したと思われる軍事的部や豪族も少なくなかったこと⁶、あるいは入鹿・間敷・新家・尾張の四屯倉が置かれており⁷、同地は大和政権にとって政治的・経済的に重要な地域であった。右の名代・子代部の設置年代から考えると、大和政権の尾張地方への進出は、少なくとも五世紀中葉以降の頃と思われる⁸、六世紀になると畿内あるいは東國へ通ずる関門として重要な役割をはたしていたと考えられる。

尾張は、倭名抄によると中島・海部・葉栗・丹羽・春部・山田・愛智・智多の八郡にわかれているが、八世紀末までに右の諸郡のうち農業生産力の高い濃尾平野の中核部にあたる諸郡に尾張氏の氏姓を検出することができ

氏	姓	職掌	位階	出典
尾治連牛麻呂				統紀、大宝二年十一月条
尾治連若子麻呂				統紀、和銅二年五月条
尾張宿禰乎己志		愛智郡大領		

氏 姓	職 掌	位 階	出 典
尾張宿禰人足	春部郡(?) 大領	外正八上	天平二年尾張国正 税帳(大日本古文 書一)
尾張連石弓	春部郡(?) 主政	外大初位上 勳十二等	〃
尾張連(名欠)	中島郡(?) 郡司	従八下	天平六年尾張国正 税帳(寧楽遺文上) 統紀、天平十九年 三月条
尾張宿禰小倉	命婦 尾張国造		
小治田連 菜 (尾張宿禰)	山田郡人	従六下	統紀、神護景雲二 年十二月条
尾張宿禰久玖利	中島郡大領		靈異記中卷二十七 某年勸籍歴名(寧 楽遺文下)
尾張連 孫	春部郡山村 郷戸主	大初位下	〃
尾張連牛養	同右戸口		〃

右の表から大化前代における尾張氏の勢力圏を推定することができ、中島・愛智・春部・山田の諸郡に勢力を扶植していたと考えられる。このことは尾張地方の古墳分布状態からも察せられる(下表参照)。この表によると、尾張氏の氏姓を検出した中島・春部・山田・愛智などの諸郡には古墳分布が認められ、ためにこの地方の古墳文化のにない手となった豪族は、とりもなおさず尾張氏ではなかったかと思われる。しかも尾張地方の古墳が巨大化の頂点に達する時期が後期(前・中期の)初頭

郡名(倭名抄)	古墳数	今日の行政区画
中 島 郡	2	中 島 郡
海 部 郡	0	海 部 郡
葉 栗 郡	2	葉 栗 郡
丹 羽 郡	4	丹 羽 郡
春 部 郡	} 15	西春日井郡(3)
山 田 郡		春日井市(3)
		東春日井郡(9)
愛 智 郡	9	名古屋市(8) 愛 知 郡(1)
智 多 郡	2	知 多 郡

この表は斎藤忠氏編『日本古墳文化資料
綜覧』第2分冊所収の重要遺跡地名表を
参照して作成した。

にくだるとみられているが(9)、畿内古墳文化は尾張地方へ比較的早い時期に波及し、同地方の古墳の巨大化した六世紀前半頃には、これを築造した豪族＝尾張氏の勢力もかなり強大なものであったと推察されよう。さて、熱田社の所在地であった年魚市郡は、年魚市が愛智に転訛したのであり愛智郡をさすが、この郡は年魚市県の旧地であった(10)。このように県の所在地に熱田社が祭祀されていたことに注意したい。上田正昭氏の研究によれば、県制とは越前より尾張・美濃を東限として西日本中心に展開した初期大和政権の地方支配体制であ

って、三世紀後半より五世紀にかけて發展したが、六・七世紀になると全く遺制化し代わって国造制が新しい支配体制として五・六世紀にかけて樹立したと述べられた⁽¹¹⁾。そうすると年魚市県は少なくとも五世紀代には存在していたとみられ、古墳の分布数が一郡に多く集中している年魚市県をふくむ愛智郡が、この頃の尾張氏の勢力中心地ではなかったかと思われる。そして尾張氏は六世紀前半頃までには年魚市県(愛智郡)を中心として四方の諸郡にわたる地域に勢力を拡大し、尾張国造としての版図を確立していたのではあるまいか。重ねて上田氏の研究によれば、初期大和政権の権力拡大において宗教的にも地方信仰の上に特殊の地位をもった族長と祭祀集団が県として重要視され、その首長が県主として従属をみたものであろうと推考された⁽¹²⁾。もし県がその地方の信仰や祭祀を基盤として成立していたことに注意するならば、年魚市県に祭祀された熱田社の性格も理解できそうに思われる。すなわち、熱田社は年魚市県を勢力中心地としていた尾張氏の奉ずる神をまつっていたのであり、同時に尾張氏は尾張地方の信仰や祭祀を管掌していたと考えられ、同氏の配下には祭祀集団としての熱田祝部が属していたのであろう。そして、さきにもたように尾張氏が農業生産力の高い濃尾平野の中枢部に勢力を

拡大していったことから、自然神より進化した土地の神であり、また農業生活を守る機能をもった尾張氏の氏族共同体の守護神をまつっていたものと考えたい。加えて尾張氏のたずさわった熱田社の祭祀は、県制から国造制に移行し同氏が尾張国造としての版図を確立してから後も、国造の重要職掌の一つとして引き継がれたと思うのである。

四

周知のように、尾張氏が古代史上に目立った活躍を示すのは壬申の乱においてであり、天武天皇側についた功臣として尾張宿禰大隅と尾張連馬身があげられる⁽¹³⁾。この二人に授けられた位階はともかく功田賜与は死後にも及んでいる。しかし、とりわけ注意したいのは、天武朝の賜姓は壬申の乱と深い関係をもち、古事記の編纂にもこの乱の影響が認められるのであって、この点から尾張氏についてみると、連から宿禰への賜姓や古事記に同氏の系譜がしばしば語られていることは、あきらかに壬申の乱によって同氏の立場を確乎たるものにしたと考えられている⁽¹⁴⁾。

古事記にみえる尾張氏の系譜記事で注意したいのは、同氏出自の后妃の所伝が孝昭・崇神・継体記とあわせて

三度もみえることである。いま、記紀によってこの所伝を対照してみると左のごとくである。

		記		記	
		后妃	皇子女	后妃	皇子女
天皇	尾張連之祖。奥津余曾之妹。余曾多本毗命。天押帶日子命。大倭帶日子命。国押人命。(孝安)				
孝昭	尾張連之祖。大入杵命。八坂之入日子命。沼名木之入日売命。十市之入日売命。				
崇神	尾張連草香女。八坂入彦命。湊名城入姫命。十市瓊入姫命。				
繼体	尾張連等之祖。几連之妹。目子郎女。建小広国押命。(宣化)				
	目子媛。武小広国排命。(宣化)				

右の表で后妃・皇子女の所伝が記紀ともにはほぼ一致しているのは、繼体天皇の場合だけである。このような記

紀にみえる后妃や皇子女の所伝は帝紀の記載にもとづくものであり、帝紀復元の手がかりとなるのであるが、津田左右吉氏は、帝紀がはじめて述作されたのは繼体一欽明朝の頃とされ⁽¹⁶⁾、また井上光貞氏は、帝紀の信憑性について五世紀の天皇たち以後、仁徳または履中以後は天皇の名や統柄・皇居・后妃・皇子女なども代々正しく伝えられた所伝を記録したものとみてよいと述べられた⁽¹⁶⁾。そうすると、右にみた孝昭・崇神の所伝は帝紀としての信憑性の少ないものとして除外すると、信を置きうるのは繼体天皇の場合だけである。ところで、繼体・欽明兩朝における動乱の史的背景や繼体天皇の立后妃記事を手がかりとしてこの頃の政治過程を巧みに分析された論考には、林屋辰三郎・直木孝次郎両氏のものがある⁽¹⁷⁾。すなわち仁徳天皇の血統が武烈天皇で絶えたため皇位継承をめぐる抗争があり、応神天皇五世の孫と称する男大迹王が越前より迎えられ即位したのが繼体天皇であって、近江・尾張方面の地方勢力の支援を受けて大和に進入し大和勢力を併せて皇位を継承したが、同天皇の死後、諸皇子のうち目子媛(記では目子郎女)所生の安閑・宣化兩天皇と手白香皇女(仁賢天皇の皇女)所生の欽明天皇を代表とする大和勢力とが対立し、後者の勝利によって、前記の地方勢力は敗北し兩朝は合一す

るのである。六世紀になると大和政権は東国経営に主力を傾けるが、この両朝の対立は東国交通路の設定にも影響を与え、尾張氏と関係がある安閑・宣化両朝側は尾張經由の陸路をとりうるが、欽明朝側は尾張を通過できなくなり、南伊勢から伊勢湾を横断し三河へ上陸する海路を利用しなければならず、ここに南伊勢が重要視されたため伊勢神宮の地位が高まり、欽明朝のはじめに皇室との関係が強化・確立したと思われるとの直木氏の指摘は興味深い¹⁸⁾。さらに考えると、両朝合一後の欽明朝には東国に至る二つの交通路が両方とも利用可能となったと思われ、このことは伊勢湾をとりまく伊勢・尾張・三河などの諸国を相互に結びつけ、東国経営の進行とともに危険や制約のある海路利用の南伊勢經由コースよりも、やはり陸路の尾張經由のコースが再び重視される結果となったのではあるまいか。そして南伊勢經由のコースにおいて東国の関門であった伊勢に伊勢神宮があったように、尾張經由のコースでは東国との陸路交通の要地にある尾張氏祭祀の熱田社が重要な意味をもつようになったと思われる。

すでに述べべきだったように、尾張氏は継体天皇擁立の一方勢力として后妃を出し、さらに安閑・宣化両天皇の支援勢力として大和勢力に対抗しえたのも、前節にみ

熱田社の起源について(前川)

たように農業生産力の高い濃尾平野の中枢部を占拠し、尾張地方における巨大な古墳文化の所有者として六世紀前半に強大な勢力をもっていたためと考えるのである。

五

前節にみた六世紀前半頃における政治情勢を念頭に置きながら、熱田社の起源について考えてみたい。そこで再びとりあげたいのは草薙剣である。この剣の一名がアメモムラクモの剣と命名されていたことは記紀にあきらかであるが、「豊受太神宮禰宜補任次第」¹⁹⁾をみると、伊勢外宮の禰宜度会氏の祖に

天牟羅雲命 一名天二上命。
一名後小幡命。

とあって、剣の名を神名としている神がみえ、ニニギの命の降臨に伴ったと語られている。しかし、この神名は記紀にみえない。つぎに

大若子命 一名大幡主命。

をあげ、この所伝に

越国荒振凶賊阿彥在天不_レ從皇化。取平仁罷止詔_天。櫻劍賜遺支。即幡主龍行取平天返事白時。天皇歡給_天。大幡主名加給支。

と記されているが、この筋書はヤマトタケルの東征説話

に類似していることに興味がひかれる。さらに延喜式や止由氣宮儀式帳によると、外宮の撰社に「草奈伎神社」の名がみえ草薙劍が伊勢外宮と深い関係をもっていたことがわかる。

伊勢神宮は皇祖神である天照大神をまつる内宮と、穀物神である豊受大神をまつる外宮とに分れているが、この起源について両宮とも元來伊勢南部の地方神(太陽神)として一体のものであり、大和の天照大神の信仰が入りこんできたときに、地方神のもつ性質のうち日の神としての信仰が天照大神と習合合体して内宮となり、在來の地方神の祭祀が外宮として存続したのであろうといわれている(20)。外宮が在來の地方神(土地の神・農業生活を守る神)の祭祀にあずかっていたのは、同宮の禰宜度会氏が地名を氏の名として何等中央の有力氏族との関係をもたない土着の豪族であったこと(20)からも察せられ、おそらく右にみた両宮の分化と祭祀の変化は、六世紀前半の敏明朝にはなされていたと思われる。

このような伊勢神宮における日の神としての天照大神の信仰をめぐる習合合体が行われた後も、外宮は地方神の祭祀を存続し、しかも劍を撰社としてしまっていたことに注意したい。土地の神であり農業生活を守る神としての外宮の撰社に劍がまつられているのは奇異に感じら

れるが、農業生活と劍との関係について古代農業労働における共同性が集団の統一を必要とし、この統一が何等かの象徴的事物にかけて維持されることが普通で、集団の威力の象徴として劍が用いられたと述べられた肥後和男氏の指摘(22)からもうかがえるように、劍は農業生活の守護的機能をはたしていたのである。ヤマトタケルの東征説話でも草薙劍は焼津の火難において草をなぎ倒しただけであって、敵を斬ったような活躍を記さず、また大若子命の所伝をみても劍は標劍シラシケンであって(23)、あくまで劍は実用目的から離れた護身的象徴物としての役割しかはたしていない。このような点から考えると、原タケル伝説ではちやうど大若子命の所伝のように、タケルの携行した劍に名がなかったと思われ、記紀にみるように焼津の火難を救ったことから劍の名に「草薙」と命名されたのは、やはり伊勢神宮の靈力を強調するために神宮関係者による改作が加えられたことを意味し、「草薙」の名もこのような過程を経て案出されたものと思われる。またこの劍の一名をアメモムラクモとするのは、この名が記紀ともに本文にみえず書紀では註記にみえているので、むしろ後に案出・附与された名ではないかと疑わせる。この名が度会氏の祖神である天牟羅雲命の名をひいていることも興味深い。しかも、この神名は古事記の

天孫降臨条に登由氣神がみえるのにもとづいて、度会氏の祖先の天孫降臨随伴の話を作ることによって与えられた信仰対象の上での名とみられている⁽²⁴⁾。古事記の天孫降臨条にみえる登由氣神の部分が多分七世紀代に外宮の由来を説明するために作られた新しい伝えであろうと考えられていること⁽²⁵⁾から推察すると、アメノムラクモが劍の名として命名されたのは、おそくとも記紀が編纂された八世紀のはじめまでに伊勢外宮の度会氏の所伝から記紀にくみこまれ註記されたのではあるまいか。

さて、タケルの東征説話に語られている草薙劍は護身の劍として携行されるが、留め置かれたところは記紀にもに記すように尾張である。劍の移動した地点を極言するならば、それは伊勢から尾張に移されただけにすぎない。この説話において草薙劍について語られた部分が伊勢神宮関係者の加上・発展が加えられたとみられているが、東征説話の骨子ともなっている劍の移動にも同様のことがいえると思う。すなわち、前節でみたような欽明朝における政治情勢によって皇室との関係が強化・確立した伊勢神宮の神威は尾張・三河地方にも進出・発展し、熱田社の祭神が尾張氏の守護神でありながら、土地の神・農業生活を守る神であったことから、熱田社が伊勢神宮とりわけ外宮の信仰と習合合体したことを示すも

のではなからうか。大和の宮廷関係者によって述作された原タケル伝説は、六世紀前半以降に行なわれた東国経営の進行と、欽明朝以降における伊勢神宮の神威の東方発展とそれに伴なう熱田社との習合合体が行なわれたことを基礎とし、草薙劍を東征にも随伴したとして神宮関係者の加上・発展がなされたものと考ええる。そして右にみたような習合合体が行なわれ、熱田社に伊勢外宮から劍が分祀されたのは、前節にみたように両朝が合一し尾張地方が重視され東国経営の進行に大きな役割をはたす欽明朝中期の六世紀中葉の頃と考え、この時期を熱田社成立の実年代とみたいのである。

六

熱田社成立の実年代を六世紀中葉の頃と推定したが、記紀をひもとくと欽明朝以降には熱田社や草薙劍に関する記事は次の二つが着目される位で以外にはほとんど見当らない。

(A) 是歲。沙門道行盜草薙劍。逃向新羅。而中路風雨。荒迷而帰。(天智七年紀)

(B) 卜天皇病。崇草薙劍。即日。送置千尾張國熱田社。(朱鳥元年紀六月戊寅条)

右の二つの記事から天武朝にいたるまでの熱田社の変

遷を説くことは甚だ至難であるが、いままで述べきいた考察を援用して考えてみたい。

(A)の記事は草薙劍の盜難事件を記したものである。まず、劍が盜まれた場所は記されていないが、古語拾遺にも「草薙神劍者。尤是。天璽。自日本武尊愷旋之年。留_レ在尾張熱田社。外賊偷逃。不能_レ出_レ境。神物靈驗。…」と同工異曲な記事がみえるように、熱田社から盗み出されたことがわかる。なお(A)の記事は事件の起った日も記さず是歳と書きはじめられているという漠然とした書き方から後世の追記とも考えられるが、一方この盜難事件が七世紀後半から書紀編纂時の八世紀はじめまでには中央で重要視されており、宮廷人の意識にのぼっていたことを示しているのではあるまいか。ところで、ここで問題となるのは、この事件後の劍の所在である。これについて『書紀通釈』には、劍が道行によって盜まれ、それ以後宮中に置かれていたとする或説を引用しているが、これは飯田武郷も疑問視しているように疑わしく⁽²⁶⁾、盜難以後も劍は熱田社に存在していたとみるべきである。(B)もこれまた唐突な記事である。この記事から天武天皇の宮廷に草薙劍があったことは事実であるが、それがいつ熱田社から宮中にもってこられたものであろうか。この時期について、永祿八年、僧道器が撰した『新

撰和漢合図』に天武十三年と記されているので、武郷はこれにもとづいているが⁽²⁷⁾、このことは書紀にみえず、またその年代には信が置きたい。

それでは、その時期をどこに求めたらよいのであろうか。この手がかりを与えてくれるのが書紀にみえる持統天皇の即位記事である。すなわち、

物部麿朝臣樹_二天盾_一。神祇伯中臣大嶋朝臣詵_二天神壽詞_一畢。
忌部宿禰色夫知。奉_レ上神璽劍鏡於皇后。皇后即_二天皇位_一。

(持統四年紀正月条)

と詳細に記している。ところで神祇令、踐祚条に「凡踐祚之日。中臣奏_二天神壽詞_一。忌部上_二神璽之鏡劍_一」とみえ、持統紀の記事と全く合致するので、右の令文は淨御原令にもそのまま存在していたとみられている⁽²⁸⁾。持統天皇の即位儀式次第は淨御原令の定めるところにのって莊嚴に行なわれたのである。持統天皇は天武天皇の皇后として壬申の乱に従ったのであるが、この乱の直接の勝利者であった天武天皇の即位記事を見ると

癸未。天皇命_二有司_一。設_二壇場_一。即_二帝位於飛鳥淨御原宮_一。(天武二年紀正月条)

とあって、持統天皇のそれとくらべるときわめて簡略である。いま、持統紀にみた即位儀式次第で神璽の劍・鏡が奉獻されていることに注意しながら、歴代天皇の即位

記事を書紀からひろってみると、つぎの通りである。

- (允恭元年紀) 則謂群卿曰。皇子將聽羣臣之請。今當上天皇璽符。於是羣臣大喜。即日捧天皇之璽符。再拜上焉。
- (清寧即位前紀) 冬十月己巳朔壬申。大伴室屋大連率百連等。奉璽於皇太子。
- (顯宗即位前紀) 十二月百官大会。皇太子億計取天皇之璽。置之天皇之坐。再拜從諸臣之位。曰。(下略)
- (繼體元年紀) 甲午。大伴金村連乃跪上天子鏡劍璽符。再拜。
- (宣化即位前紀) 二年十二月。勾大兄広国押武金日天皇崩無嗣。群臣奏上劍鏡於武小広国押盾尊。使即天皇之位焉。
- (推古即位前紀) 群臣請淨中倉太珠敷天皇之皇后額田部皇女。以將令踐祚。皇后辭讓之。百寮上表勸進至三千三。乃從之。因以奉天皇璽印。
- (舒明元年紀) 丙午。大臣及群卿共以天皇之璽印。獻於田村皇子。
- (孝德即位前紀) 天豐財重日足姬天皇授璽綬禪位。

右の記事中にみえる璽符・璽・璽印はすべて「ミシルシ」とよみ、即位の象徴物をさすのであるが、その内容があきらかではない。繼體・宣化兩紀のように鏡・劍と明記され、神祇令にも「此即以鏡劍稱璽」とみえることから単に鏡・劍をさすようにも考えられるが、璽に印・符や綬が付加されており、集解、神祇令、古記に「唐令所云。璽者以白玉為之印也」とみえるので、

熱田社の起源について(前川)

あながち鏡・劍をさすものとは限らない。また鏡・劍が皇位継承を象徴する伝世のものであったかどうかとも疑わしく、総じてこれらの記事には中国の即位儀式の潤色が加わっていると考えられる。しかし、これらの記事で注意したいことは、ミシルシの奉獻者が群臣・百寮であり(これらの語にも後世の潤色が認められよう)、このミシルシを受け取ることによって天皇に即位したのである。すなわち、ミシルシは即位の象徴的意味をもつと同時に、群臣の天皇に対する服属的意志の表徴でもあった。ここで想起されるのは、景行十二年紀にみえる神夏磯媛が磯津山の賢木の上枝には八握劍をかけ、中枝には八咫鏡を、下枝には八尺瓊をかけて帰順した話、あるいは仲哀八年紀に筑紫岡県主や伊弉県主などの地方豪族が服属する際、五百賢木に白銅鏡・十握劍・八尺瓊をかけて天皇の行幸を迎え、これらを捧げたとみえる記事である。このように神威をあらわす宝器としての鏡・劍・瓊の奉獻は、あきらかに地方豪族が天皇を自己の支配者と認め服属する意志をあらわしたものであって、これらの宝器を受け取る天皇の立場からいえば、部族の生活を守るために神の保護が必須のこととされた社会では神威をあらわすための宝器の管理は司祭的首長の責任でもあり、またかれの地位の保証でもあったであらう。右の記事

にみたような天皇即位にあたって群臣や百寮が行なうミシルシの奉獻も、本質的にはこれと同様の意味をもっていたと考えられ、天皇が司祭の首長として四―五世紀の全国統一過程において地方族長の信仰的権威の根拠を掌握し、これを媒介として大和政権の支配力を浸透させていった頃からの古制であろうと思われる。

しかし、持統紀にみたように神璽としての劍・鏡が宮廷神祇管掌氏族によって奉獻されるように制度化したのは浄御原令によってであるが、この制度化の要因には天皇現神観の発達が裏付けられていると思われる。天皇現神観は大化前後における皇室の急激な政治的發展によってもたらされたのであり⁽³⁰⁾、ために天皇の政治的地位は不動となり神格化された。このことから即位に行なわれるミシルシも、ことさらに神の璽とされて鏡・劍で代表され、これらが奉獻される意味は従来の服属の意志の表徴に加えて、現神としての皇位を継承する意味が大化前後から重視されたためであって、またこのように即位儀礼を制度化し荘嚴にすることが浄御原令のねらいであったと考える。浄御原令は天武十年に制定に着手され、天皇即位前年の持統三年六月に發布され、天武朝の成果を加えた大化以来の新法を集大成したものである⁽³¹⁾。そうすると、浄御原令ののっとって行なわれた

書紀にみえる持統天皇の即位儀礼の母胎は、古くは四五世紀以来の古制にあったのであり、近くは書紀にはきわめて簡略に記されているが、天武天皇の即位儀礼次第にあつて、天武天皇即位の場合も持統天皇の場合と同様に、劍・鏡をミシルシとして奉獻されたために浄御原令に制定されることとなったのではあるまいか（この奉獻に忌部氏がたずさわっているのは天武朝の神祇政策を考慮する必要がある）。壬申の乱は天智朝の中央集権化政策に不満をもつ豪族が天武天皇を支持し、とくに美濃・尾張などの東国豪族の勢力を利用し、また伊勢神宮の援助もあつて⁽³²⁾、天武天皇の勝利となつた。この乱に東国豪族の一つとして尾張氏が参加したことはすでに述べたが、天武天皇の即位にあつて天皇を支持した諸豪族は臣従を誓い、天皇が美濃・尾張などから兵を起したという記念の意味をもって、神璽の劍として尾張氏祭祀の熱田社に存置されていた草薙劍が奉獻されたのではなからうか。草薙劍は天武天皇即位に際して熱田社から大和の宮廷に運ばれ、天皇の身辺に置かれていたが、朱鳥元年に再び熱田社へ返還されたと考えるのである。

草薙劍が語られている古事記の天孫降臨の説話は、天武朝にほぼその形が整えられ、このとき特別に勢力をもっていた伊勢神宮に関係の深い神々がこの説話にとり入

れられたのではないかと考えられ⁽³³⁾、また記紀にみるヤマトタケル伝説は、天武天皇によって古事記の前身が編纂されたとき、六世紀代に成立した原伝説に代わって伊勢神宮所伝のタケル伝説が正伝として採用されたのであろうといわれている⁽³⁴⁾。このように、草薙剣を語る諸伝説が天武朝を中心に整形されたのも、この剣がすでに述べたように天武朝の宮廷において重視されたためであり、壬申の乱における尾張氏の参加によって、熱田社とともに保護を受ける結果となったのであろう。なお、この剣が熱田社に存置されていたのに伊勢神宮の神威を象徴するものとして語られているのは、六世紀中葉頃に行なわれた習合合体以後も熱田社は伊勢神宮の分社という関係が維持されていたためではなからうかと推察され、とくに古事記では熱田社について一言もふれていないのは、草薙剣についての諸伝説が主として神宮側の所伝を通して語られたためと考える。書紀に「初日本武尊所佩草薙横刀。是今在尾張国年魚市郡熱田社一也」(景行五十一年紀)とみえるのは、おそらく熱田社が天武朝の宮廷の保護を受けるようになったため、この社が草薙剣の重要視とともに書紀編纂者の意識にあり本文に挿入されたものと思われ、右の記事中にみえる「今」は、草薙剣を熱田社に返還した朱鳥元年以降、書紀完成時の養老

熱田社の起源について(前川)

四年までの間、すなわち七世紀末から八世紀のはじめにかけての頃を示すものとみたい。

以上、粗略ながらも草薙剣の活躍が語られているヤマトタケル伝説を主としながら、熱田社の起源について考察した。熱田社は天武朝をすぎ奈良時代には史料に全く姿をみせず、平安初期には神階昇叙の記事が散見され⁽³⁵⁾、とりわけ問題の多い神社である。また同社の祭祀にあたっていた尾張氏や三種の神器の成立についても種々論ずべき点が少ないが、紙数もつきたので、これらは今後の課題としたい。

〔註〕

- (1) 津田左右吉氏『日本古典の研究』上一四一頁。
- (2) 上田正昭氏『日本武尊』二一〇―二二一頁。
- (3) 直木孝次郎氏「ヤマトタケル伝説と伊勢神宮」(『京大國史論集』一所収) 六〇頁。
- (4) 『古代歌謡集』(『日本古典文学大系』所収) 五八頁のよみ下しに従う。
- (5) 直木孝次郎氏「古事記天孫降臨条の構成について」(『日本古代史論叢』所収) 四九九頁。
- (6) 直木孝次郎氏『壬申の乱』八〇―八二頁。
- (7) 竹内理三氏『律令制と貴族政權』八二頁。
- (8) 允恭朝所有の刑部の氏が検出されること(統紀、神護景雲元年五月戊辰条) から推定される。

- (9) 澄田正一氏「古墳文化に現われた地域社会―尾張」(『日本考古学講座』5所収) 一一一―一二二頁。
- (10) 上田正昭氏「国県制の実態とその本質」(『日本古代国家成立史の研究』所収) 一三四頁。同氏の調査にみえる。
- (11) 上田氏、註(10)稿、一四三頁。
- (12) 上田正昭氏「県主と祭祀団」(註(10)前掲書所収) 一七四頁。
- (13) 統紀『天平玉字元年十二月壬子条および同二年四月庚申条。
- (14) 上田正昭氏「氏族系譜の成立」(註(10)前掲書所収) 三二〇頁。
- (15) 津田氏、注(1)前掲書、四六頁以下。
- (16) 井上光貞氏『日本国家の起源』一一九頁。
- (17) 「継体・欽明朝内乱の史的分析」(『古代国家の解体』所収)・「継体朝の動乱と神武伝説」(『日本古代国家の構造』所収)
- (18) 藤谷俊雄・直木孝次郎両氏『伊勢神宮』二二―二三頁。
- (19) 群書類従、補任部所収。
- (20) 註(18)前掲書、二六頁。
- (21) 岡田精司氏「伊勢神宮の起源と度会氏」(『日本史研究四九』三六頁)。
- (22) 『古代伝承研究』二八一頁。
- (23) 万葉集注釈巻第一所引の伊勢国風土記逸文にも「天日別命。神倭磐余彦天皇。自彼西宮。征此東州之時。随天皇二到三紀伊国熊野村。干レ時。随三金鳥之導。入三中州二而。到レ於免田下果。天皇勅二大部日臣命曰。逆党胆駒長賊。
- 宜早征罰。且勅天日別命曰。国三有天津之方。宜レ平其国。即賜三標、劔。」とみえる。
- (24) 岡田氏、註(21)稿、三五頁。
- (25) 註(18)前掲書、二八頁。
- (26)・(27) 『日本書紀通釈』三七九〇頁以下。
- (28) 坂本太郎氏「飛鳥浄御原律令考」(『法制史研究』4所収) 一五頁。
- (29) 小林行雄氏『古墳時代の研究』一四二頁。
- (30) 直木孝次郎氏「天照大神と伊勢神宮の起源」(『古代社会と宗教』所収) 一八頁。
- (31) 直木孝次郎氏『持統天皇』二〇四頁。
- (32) 註(18)前掲書、三六頁。
- (33) 直木氏、註(5)稿、四九九。
- (34) 直木氏、註(3)稿、六二頁。
- (35) 日本紀略、弘仁十三年六月庚辰条によると従四位下、続後紀、天長十年六月壬午条に従三位から正三位を、以後、三代実録、貞観元年正月には従二位、同年二月には正二位を授けられている。
- (追記)
この小稿はヤマトタケル伝説を素材とした研究の一部である。なお、別に「ヤマトタケル白鳥伝説の一考察」(『日本歴史』第一七二号 昭三七・九)を発表したので、小稿とあわせ読んでいただければ幸いである。